

- 一、われわれは無限なる叡知としての神の存在を信じる。
- 一、われわれは物的・靈的のいかんを問わず大自然の現象はことごとくその無限なる叡知の顕現したものであることを信じる。
- 一、われわれはその大自然の現象を正しく理解し、その摂理に忠実に生きることが真の宗教であると信じる。
- 一、われわれは自分という個的存在が「死」と呼ばれる現象を超えて存続するものであることを確信する。
- 一、われわれは、いわゆる「死者」との交信が科学的に証明ずみの事実であることを信じる。
- 一、われわれは人生最高の道徳律が「汝の欲するところを他人に施せ」という黄金律に尽きることを信じる。
- 一、われわれは人間各個に道徳的責任があり、物心両面にわたる大自然の摂理にしたがうか否かによって、本人みずから不幸を招くものであることを信じる。
- 一、われわれはこの世においても死後においても「改心」への道はつねに開かれており、いかなる極悪人といえども例外ではないことを信じる。

スピリチュアリズムは科学である。なぜなら靈界から演出する心靈現象や超能力を科学的に分類し分析しているからである。

スピリチュアリズムは哲学である。なぜなら頭幽両界の自然法則を考究し、それを現在までの観察事実に照らして哲学的理論を導き出すからである。また過去の観察事実やそれに基づく理論も、それが理性的に納得がいき現代の心靈科学によって裏づけられたものであれば、これを受け入れるにやぶさかではない。

スピリチュアリズムは宗教である。なぜなら宇宙の物的・道徳的・靈的法則を理解し、それに忠実たらんと努力するからである。それはすなわち神の御心に忠実たらんとすることにほかならない。

スピリチュアリズムによると死後人間は段階的に向上・進化していくことになっているが、人生における大きな失敗・挫折・怨恨等が足かせとなって、いつまでも地上的雰囲気から抜け切れずに人間に悪影響を及ぼしている霊も少なくないことが明らかとなってきた。その類いの霊を因縁霊とか地縛霊と呼んでいる。

スピリチュアリズムによると、人間が地上へ誕生してくるにはそれなりの目的ないし使命がある。ある人は前世の罪悪を償うために、ある人は人類の精神的ならびに靈的進化を促進する使命をもって生まれてくる。が、この肉体という鈍重な物質的器官に宿ることによって、そこにはさまざまな制約や煩惱が生じ、所期の目的や使命を成就するのは容易なことではない。そこでそれを靈

界から導き援助するための複数の霊がついている。それを総合的に「背後霊」と呼び、因縁霊などと区別している。

背後霊には大ざっぱに分類して守護霊と指導霊と支配霊とがいる。守護霊は魂の親のような存在で、切っても切れない関係にあって終生変わることがない。その使命は自分の扶養家族ともいべき地上の人間の霊的進化のために最も有効な体験を積ませ、それが過酷すぎる場合は霊的・精神的に援助して天命の全うに支障のないように計らうが、「守護」という用語からとかく想像しがちなように、「何でも守ってくれる霊」と思ってはならない。

指導霊というのは地上生活を営む上での指導・援助をする霊で、先祖霊が多く、学問、芸術、技術、経済、健康等々、実生活全般にわたって面倒をみてくれる。当然、幼少時から成長に応じて適宜に入れ替りが行われる。国籍の異なる霊である場合もありうる。

支配霊というのはとくに靈能者や霊媒について、その中心的責任者として支配する霊のことで、その使命が続くかぎり、そしてその使命に忠実であるかぎりは援助してくれるが、名誉心や金銭欲、色欲などがからんでくると高級霊は去ってしまい、あとは低級霊に支配されて、営業上は繁盛しても、霊的能力はあか抜けのしないものになってしまう。

さて博物館へ行って実際に観察するとよく分かるが、有史以前の動物の頭蓋骨には必ずといってよいほど、「穴」それが次第に使用されなくなり、今日、とくに人類においてほと

んど退化してしまっている。今日なおその機能を維持しているのは蛇類で、しかも二つもそなえている。一つは頭部のいちばん奥、もう一つは表面にあり、透明に近い薄い表皮で被われている。

人間の頭蓋骨にもその「第三の眼」の名残りが見られる。生まれて間もない赤ん坊の上頭部の前あたりを軽くさわってみると、一箇所だけとくに柔らかい所がある。人類発生の初期の段階ではそこが第三の眼の穴として使用されていたのであるが、肉眼をはじめ肉体機能の発達とともに次第に使用されなくなり、今ではほとんど完全に退化してしまっている。その退化の過程は今いった赤ん坊の柔らかい部分が成長とともに次第に固くなっていく過程と同じだと思えばよい。

しかし退化したといっても松果体そのものは依然として残っているから、訓練一つで再び第三の眼としての機能を甦らせることができるはずである。

いちばん良い方法は精神統一による呼吸法である。心をよく落着けてからゆっくりと深呼吸する。すると右の手から一種の宇宙エネルギーが流れ込み、それが頭の中核まで行きわたって松果体を刺激する。そこでちよつと息をとめる。するとその間に、いったん松果体に集まったエネルギーが全身の心霊中枢に行きわたる。それからゆっくりと息を吐き出す。すっかり出し切ったところで再び同じ要領で吸い込む。すると今度は左の手から同じエネルギーが流れ込む。

大切なのは、たとえエネルギーの流入が感じ取れなくても、それが流れ込みつつある状態を想像しながら、あるいはそう信じながら呼吸することである。

これを規則正しく毎日続けるのであるが、深呼吸は度が過ぎると疲労を覚えるし、時には不快感を催すこともあるから、長さも強さも回数も、腹八分ということを心がける必要がある。

靈性を開く 潮文版 Ruth Welch